七不思議部

尚人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
七不思議部

【Ｎコード】
Ｎ０８６０Ｃ

【作者名】
尚人

【あらすじ】
公立会談高校。噂の部はここの三階、一番奥の部屋にあります。この世は不思議な事が絶えず起きています。唯それに皆が気づいていないだけ。彼らが出会う不思議は在りそうで無い実際の出来事、知る者が居れば知らずに終わるもの居る。信じる者も居れば、信じない者も居る。七不思議部はそんな空想染みた現実を求める者達の集まる部である。

プロローグ、相談者

０「プロローグ、相談者」

公立会談高校。三階の一室には七不思議部と書かれた表札が一際目立っていた。一人の女子生徒はその勧誘のポスターを無視し、部室の中へと入っていった。中には部長と書かれた表札の置いてある机に足を乗せ、アイマスクをしながらいびきをかき眠っている男がいるだけだった。部室の中はまるで接待室の様にテーブルを囲み、いかにも高級そうなソファーが並べられていた。後ろから声がしたのは、彼を起すべきなのかを考えている所だった。

「彼方、入部希望者？」

後ろを振り返るとこれでもかとばかりに難しそうな本を両手一杯に持っている少女が佇んでいた。彼女は持っている本の横から顔を出し言った。

「入りなよ。ほら、其処のソファーで座った座った。今、何か飲み物入れるから。」

満面の笑みを見せられ、今までの緊張の二文字はもう無いだろう。言われたとうりに、女子生徒はソファーに座った。それを見た彼女もニコッと笑い持っている本をアイマスクの男が足を上げ寝ている机にドンと音を立てておいた。

「大体こいつは、私にこんな本探させておきながら、のん気にいびきまでまでかいちゃって。」

そう言うと寝ている男のしているアイマスクを引っ張り、勢いをつけ放した。パチン！大きな音を立ててアイマスクは元の位置へと戻ったが男はまるで起きる気配が無かった。

「もう。」

「駄目駄目、そいつを起すのはちょいとしたコツがいるんだよ。」

そう言いながら今度は眼鏡の男が部室へと入って来た。彼はおもむろに寝ている男に近づき耳元でそっと囁いた。

「おい、早く起きないとアニメ始めるぞ・・・。」

ピクと体が一瞬動きアイマスクの男は目覚めた。

「なに～！！早く録画しないと、って！真っ暗だぞ。何も見えない、まだ夢の中かぁ～！？セーブポイントにたどり着いた途端のバグはキツイ～！！」

あたふたした彼のアイマスクを眼鏡の男が無理やり取り外した。寝癖が目立つ髪形は言うまでも無いだろう。

「分けの分からん事言うな、ほらお客さんだぞ。」

この時初めてこの女子生徒はこのアイマスクの男と目が合った。あ！っと何かを思い出した様に彼はゆっくりとその女子生徒の前のソファーに座った。全くと、呟き彼を起した眼鏡の男も腕を組みアイマスクの男の横に佇んでいた。ハイどうぞっと目の前にコーヒー

を置き、彼女も今まで寝ていたアイマスクの男の横に座りこんだ。

「で、用件は？あ！分かっていると思いますがここでは冗談は通じませんよ・・・・。」

「はい・・・・。」

そして、その女子生徒は静かに話を始めた。

第一話　噂のタイムマシーン　前編

1『噂のタイムマシーン　前編』

三階の奥の部屋、七不思議部と書かれた表札のある部室では、バキューン、ズドドド、ドッカーンなどという効果音が流れていた。

「いや～やっぱりアニメはいいねぇ～」

目の前に置かれたテレビで昨日の内に取った深夜アニメをじっくり鑑賞しているのは、ここ七不思議部の部長　滝野　翼である。この部員　宮野　楓　の入れたコーヒーは格別だった。それをすすりながら彼は心躍らせていた。

「う～ん、早く次回の話を見たいなぁ～。なあ、楓」

うんそうだねと相槌を打つ楓はその日の宿題をもう一人の部員海棠　明　と共にやっていた。

「お～！！このフィギュア欲し～！！」

ハイテイションの翼を横目に明と楓はため息をついていた。

「はぁ～明後日からの中間テストやばいなぁ～」

シャーペンをくるくる回しながら明が言った。

「感動〜！！」

ハァ〜、明と楓のため息が部屋中に広まった。

「あの〜ここって七不思議部ですか？」

ドア越しから顔を出し、中の様子にいささか不安を抱きながら彼女は部室内へと入って来た。

「相談者か。勉強は一時中断だな、ほら楓さっさと机の上片付けて何か飲み物を、翼もこっち来いよ。」

明の意気込みは勉強から逃れる為のものであったのだが、楓は文句を言えなかった。翼も渋々ビデオの電源を切り、依頼者の女性の前に座った。

「楓は記録を取って。翼は資料の用意。それで彼方の名前と、どんな依頼でしょうか？」

明だ。翼も楓も言われるままにそれぞれの用意をした。

「私は二年の　雪森　蘭　です。依頼は、その・・・なんていうか。・・・探してるんです。時間をコントロールできるものを、その・・・お願いします。」

そう言うと彼女は足早に部室を後にした。唖然とする明と楓の横で翼は古い日記のようなものと睨めっこをしていた。

「多分これだな、タイムマシーン的な感じ。今から二十年前にある

男子生徒が地震を予知、旧校舎が崩れる事を予告する。彼はこの出来事に対して三回目だと証言、質問の最中に彼の膝の上に居る野良猫が彼の目の前突然死したんだって。そうしたら彼はこう言ったらしいよ。又、駄目だっと・・・。」

「でも何でそれを雪森さんが？」

首をかしげる楓。明は翼が手に持っている古い日記を奪った。

「でもさぁ～本当にこんなもんがあるのかね～。こいつもたまたまじゃねえの？」

「どうかねぇ～まぁとりあえず情報収集でしょ。」

ニッコリと翼が微笑む。明と楓も明後日のテストの事などもう頭に無いのだろう。

「とりあえず、楓は図書室から当たってよ特に卒業文集なんかを中心に。明は地下の掲示版から情報集めてよ。」

公立会談高校。その施設は公立とは思えない設備である。地下二階から上は五階までの学校には様々な専門クラスを始め、部活の数も数え切れないほどある。勿論、ここの図書室は有名な図書館並みのクラスで無い本が無いがここの売りである。明はその膨大な数の本からお目当てのものを見つけなければならないのだ。

「じゃあ今から三時間後に又ここに集合ね。」

そう言うと楓は図書室に向け走りだした。

「で、俺は地下の掲示板かよ。あそこはデマも多いぞ。」

「まぁそこは明の腕の見せ所だろ。」

翼の笑みに明は苦笑いで返した。部室をでる明の手元にはメモ帳と煙草が握られていた。

地下の掲示板。地下二階のある部屋にある情報交換の為の部屋。ここでは匿名で様々な人間が集まりあらゆる情報を提供し合う為、情報量も多くデマもあり退屈な時間が過ぎる場だと明はここを嫌っていた。

「さてと、俺も行くかな。とりあえず　奈菜　の所にでも行くか・・・。」

手に付けてある時計を確認し、翼は部室を後にした。三重に掛けられた鍵は翼にとっては、当たり前の事だった。

一階、奥深くの通路は明かりすらついていなかった。黒く塗られたドアをノックもせずに翼は堂々と入っていった。うっすらと明かりのついた部屋は異様な空気が漂っていた。その奥の部屋を隠すための黒カーテンが又いっそうに不気味である。

「オッス。奈菜入る？秋。」

目つきの悪い秋と呼ばれる少女は無言で頷き黒カーテンの置くへと入っていった。しばらくすると置くから奈菜の声が飛んできた。

「今、手が放せないから勝手に入って来て。」

言われるままに翼は黒カーテンの置くへと入って行く。

「何時来てもこの部屋って黒魔術でもやってそうだな。」

「知るって事はつみだよねぇ～。まあ私はあんた達と違って現実的

な事しか知らんけどね。」

三台のパソコンを置き、中央で巧みにそれらを操る彼女こそ、桂木　奈菜　である。彼女の特技はそれらのパソコンを使っての情報収集である。彼女にとってはハッキングなども容易く、翼とはオタク仲間である。

「お前って地下の掲示板には行かないの？」

近くに置いてある奈菜のチョコを食べながら分けの分からない文字の出ているパソコンの画面へと目を向ける。

「奈菜のチョコたべるなよ～。それとあそこには嫌な奴がいるから行かないの。」

ふ～んと翼は自分で聞いたにも関わらず、そっけない返事を返した。

「こんなのばっかり食べてるから、高一にもなって幼児体系なんだよ。」

「セクハラだ。」

と突っ込んだ奈菜は顔を赤らめていた。

「大体今日は何の様？」

「そうそう、タイムマシンの情報がほしくてさ。」

きょとんとした奈菜はため息をついて言った。

「あのさぁ～だから、私はそういうの信じてないから。」

「大丈夫大丈夫、この学校の職員レベルの所まで入れば何か分かるって。」
「もぉ～この学校のセキュリティーは警察庁並みに硬いんだぞ。」
などといいながら奈菜の手はしっかりと動いていた。
「で、報酬は？」
これだっと翼はポケットから出したトレカを奈菜の目の前に掲げた。
「おお～それは、世に数枚しか出回って無いと言う幻の・・・。」
言うまでもなく奈菜の目が輝き明らかにさっきよりも手が早くなっていた。翼は近くに置いてある本を手にとりその場に座って読み始めた。
しばらくして、奈菜が大声をあげた。
「やった～あったあったあったよ翼っち。何だかねそれらしい情報の出所は地下一階の運動部の物置にあるらしいよ。ほらテレカ頂戴。」
画面に映る映像を自分でも確認した。翼の腕に付けている時計が鳴り出した。それを止めると翼は持っていたテレカを奈菜に渡し礼を言った。
「ありがとな奈菜。さてとじゃそろそろ戻るわ。」
秋にも別れを言い、部屋を後にした。部室に戻ると、その前では楓と明が立っていた。

「もう、早くここ開けてよ翼〜。」

楓に急かされながら翼は鍵を開けた。一階から三階を往復した翼は部屋に入るなり、ソファーへと寝転がった。その隣に楓が座り、翼の前には明が座った。翼は寝ながら明を指差し言った。

「じゃあまずは明君、集まった情報を教えてちょ。」

「俺からかよ。えっとまず分かった事が二つ、まず一つはそれがどうも時計である事。もう一つはそれはどっかの部屋に飾られてたって事くらいだな。」

へぇ〜とうなると翼が飛び起き目線を楓へとやった。

「じゃあ次、楓。何か分かった？」

「うん。言われたとうりに文集を調べたら、野球部の人がそれらしい事を書いてたよ。だからきっと野球部の部室にあるんだよ。」

「翼は何か分かったのかよ。」

よしっとうなると翼は二人を指差し微笑んだ。

「君達はすばらしい。じゃあまあまとめるとね、それは野球部の所持品で時計、今は地下一階運動部の物置に眠っているらしい。」

運動部専用の物置には、それぞれのスポーツに欠かせない道具が数多くしまってあった。棚から箱を取り出す度に積もっていたホコリが宙に舞う。そんな中、翼達はお目当ての物を探していた。

「ケホケホ、ここホコリとかすごいね〜。お掃除してなかったのかなぁ〜？」

「してる分け無いだろ。」

すかさず明が返す。キャー蜘蛛っと楓が近くの翼に飛びつくのはこれで二度目だった。

「大体、翼どれが野球部の品よ。箱ばっか多くて。」

キャーっと置くの箱を取ろうとして楓がしりもちをついた。

「お！やったな楓。お手柄じゃん。」

翼は楓がしっかり持つ小さな箱を指差した。そこには野球部と今にも消えそうな文字で書かれていた。中には既に時を刻み終わり、ひっそりとその古風だけを残す懐中時計がポツリと入っているだけだった。

第二話　噂のタイムマシーン　後編

『噂のタイムマシーン　後編』

初めてこの古い、いや、まだ新しくそのボディーが美しかった懐中時計がその力を示したのは今から何十年も前のことである。この時計の不思議な能力を始めて使った人間は野球部のピッチャーのポディションにつく麻野　太郎である。彼は大事な試合の前にも関わらずその黄金とまで言われた腕を昨晩の喧嘩で痛めてしまった時であった。彼は他のメンバーの練習の最中、一人部室に籠もり泣いていた。彼は目の前の机に置いてあるその懐中時計を左手で徐に手に取り、その時計の針を戻した。

「昨日に戻れたら、俺はあんな事をしない・・・。俺も試合に出れたのに・・・。」

カリカリカチ、詰まった様なその感覚と共に彼の目の前が真っ白になった。

「で、本当にこれがタイムマシーンなのかよ。」

明である。彼の思うタイムマシーンとは、未来のロボットが乗ってきたような乗り物をイメージしているためである。徐ろに明がその懐中時計の針を動かそうとした時、翼はそれを明らかから取り上げた。

「無暗矢鱈に針を動かさない方がいいよ。」

何でだよっと明が翼の顔を睨んだ。その横から楓が二人にコーヒーを出しながら言った。

「だってもし、本当にタイムマシーンなら時を越えちゃうよ。」

あっと納得する明を無視し、翼は話を進めた。

「もしじゃなくて、これがタイムマシーンなんだよ。」

ニッコリ笑う翼はまるで子供のようである。

「じゃあ、それで好きな時間に行けるってか。」

「じゃあまあ、僕の肩に手を当ててよ。」

言われるままに明と楓は翼の方に手を置き、よしっと翼は手に持つ古い懐中時計の針を深夜の三時に向けて針を進めた。

ガリ、カリカリカチ。詰まった様な音と共に翼達の目の前が真っ白になった。

真っ暗な部室内は不気味に静まり返っていた。辺りは闇に包まれ、聞こえるのは夜独特の音だけだった。

「もう、始ってるよ。」

そう言うと翼は自分の机の上に置いてあるテレビのスイッチを入れた。テレビの映像は言うまでも無く翼の趣味の番組だった。そんな翼を明と楓は呆然と見つめるだけだった。

「ねえ、翼。ここって。」

まだ状況が分からない二人で最初に口を開いたのは楓だった。

「ん？ここ。ここはそうだな～僕らが居たあの時間から約十一時間後の世界かな。いや～俺って寝るの早いからさ～。やっぱリアルでみたいじゃんか～。」

呆れ顔で楓は翼を見ていた。

「ん！？何々。今日は番組を急遽変更して・・・。」

テイションの高かった翼は一気に鬱状態になった。ゆっくりと懐中時計を取り出し、二人の方を見て翼が言った。

「ほら・・・帰るよ。僕に捕まってください・・・」

あ・・あぁと明がそんな翼を哀れみ、楓と共にまた彼の方へと手を置いた。

「えっと、あの時間に戻るにわっと・・・。」

カリカリカチっと詰まった音の後、彼らは又その不思議な感覚に襲われた。目の前には楓の入れたコーヒーが湯気をあげていた。

「これどうやって使うんですか？」

不思議そうな顔で雪森　蘭は手に持つ古い懐中時計を見ながら言った。明は蘭の横に無理やり座りこみ得意げに説明を始めた。それを蘭は少し距離を置きながら聞いていた。しばらくして、彼女が立ち上がり時計を持ち部室を後にしようとした蘭を翼が止めた。

「我々も同行します。それがイヤなら、それを返してください。」

蘭は反論をしたものの、翼との口論ではとてもじゃないが勝てなかった。渋々、彼女は同行を承知した。彼女の方に楓が手を置き、楓の方には明と翼が手を置いた。

目を開けると、夕暮れ時の教室に翼達はいた。そこで突然、雪森蘭が何故この時計を探していたのかを静かに語り始めた。

「昨日、私の親友が交通事故で死んだの・・・。そこで私はこの時計の事を知ったわ。もうすぐここに彼女が私を向かいに来るわ、昨日は断ったけど今日は違う・・・。私が彼女を救うの・・・。」

彼女が言ったとおり、彼女はここへ来た。

「蘭。一緒に帰ろう。あ・・・お友達？」

眼鏡を掛けた女性が教室に入るなり言った。蘭は翼達をチラッと見た後、戸惑っている彼女の方を向き、ううんちがうのっと言いながら彼女の元へ走り寄った。

「僕らも行こう。」　翼だ。それに楓と明が相槌をうち彼女の後を追った。

楽しそうに話をしながら、彼女達はその現場へと着実に近づいていた。横断歩道を渡るその瞬間にその時は来た。危ないっと歩道に突っ込んで来る車から蘭は見事に彼女を救った。

「やった。大丈夫。大丈夫だよね。」

涙を流しながら、蘭は彼女をまじまじと見つめた。彼女が口を開き何かを言うのが翼達にも見えた。キキーっと大きなブレーキ音の後に歩道に突っ込んだ車を避けようとしたトラックが彼女へと向かって走って来たのだ。

イヤーっと大きな声を上げその場で蘭はしゃがみこんだ。急いで、翼達は蘭に駆け寄った。

目の前の恐怖に楓は足がすくんでいたが、無理に翼が楓の腕を引っ張った。時計をセットし、翼達は元の時間へと戻った。

大粒の涙が蘭の瞳から溢れ出す。楓もあの光景からか蘭と同じく涙を流していた。翼と明は唯黙って居ることしか出来なかった。

「もう一度・・・。もう一度あの時間へ生かせて。」

そう言った彼女の瞳には怒りのようなものが見えた。

「駄目です。」

翼が言った。勿論彼女からはどうしてっと問いが帰って来た。

「この時計は過去や未来へは自由に行き来できますが、時を変える事はできないようです。だから、何度彼女を救ったとしても、彼女に起こる事は変わらないのです。」

それを明と楓は黙って聞いていたが、蘭はそれでも反論を続けた。

「やってみないとわからないわ。さっさとあの時に戻してよ。」

「彼方は！彼方は彼女に何回苦痛を与えれば気が済むんだ！」

普段温厚な翼が起こるのは、明や楓も久しぶりに見る光景だった。

そんな翼の言葉で彼女はうつむき唯涙を流すだけだった。
夕暮れ時、翼達４人は彼女のお墓の前にいた。楓と蘭はお墓に花をそえ、そっと手を合わせた。
「あの時、彼女は私にありがとうって言ったの・・・。」
涙を流す蘭を楓はそっと慰めた。
「これは、無いほうがいいな。明頼む。」
そう言うと翼は持っている懐中時計を明に渡した。明はそれを思いっきり握り潰した。
「あ！てことは、今日のアニメは放送されないのか！ビデオ録画切っておかなきゃ・・・。」
ははっと明に笑われた。
「二人とも～帰るよ～」
楓が二人を呼ぶ。二人は、粉々になった懐中時計を振り返ることと無くその場を後にした。風が強くなったその時に彼女がありがとうっと言ったのが聞こえたような気がしたが、それを確かめる術はもう無かった・・・。

第二話　噂のタイムマシーン　後編（後書き）

完成度の薄い話になってしまいすいません＾＾；
これらを含めてこれからの話を頑張って行きたいと思っています。

第三話　映らない鏡　前編

第三話　映らない鏡　前編

昨日、二年Ａ組の女子生徒二人が突然消えた。それに気がついたのは、同じクラスで二人とは仲のよかった草辺実宮（くさべみく）であった。彼女の怯えたその様子は震える手先でも判断できた。頭を抱えて震える彼女はまるで何かに怯えているようだった。

「それで、彼女達の事は誰一人として覚えていないと・・・。」

明が質問する隣では、翼はケータイゲームに夢中だった。それを楓が注意すると翼は渋々それをテーブルの上へと置いた。

「そうなんです。誰も、誰も二人のこと覚えてなくて、私どうしたらいいのか・・・。」

ガタガタ震える彼女を翼はじっと見つめていた。彼女は力無く立ち上がり部室を出て行った。

「本当に人が居なくなるなんて事があるのかね？」

腕組みをした明は廊下を力なく歩く彼女の後ろ姿を見ながら言った。

「あの人、大丈夫かな・・・。」

楓もそんな実宮の後ろ姿を明と共に見つめていた。部室の中では翼がケータイゲームに夢中になっていた。

「鏡だな・・・。」

そう翼が小声で言った。すかさず明は翼に問いかけた。

「鏡？それどう言う事だよ。鏡が人を食っちまったのか。」

まさかなと明が微笑する。翼もつられて笑いながら笑顔で言った。

「うん。そうだよ。」

場の空気が一瞬にして凍りついた。部室内には翼のゲームの音だけが響いていた。

「で、その鏡って一体何処にあるの？」

楓が首をかしげながら言った。

「昔は・・・昔あの鏡は二階から三階に上る階段に取り付けられていたんだ。でも何年も前にその鏡は、取り外されたんだ。」

「で、お前は結局その鏡が今何処にあるのか分かるのかよ。」

翼が静かに頷いた。でも、そう言って翼が話を続けた。

「大体そんな不思議な事があるのかね・・・。」

翼の発言の矛盾をあえて明は指摘しなかった。それよりも、翼自身がこの不思議を否定したことに寧ろ疑問を明は感じていた。翼のやっているゲームの画面にはゲームオーバーの文字が光っていた。

時刻は既に十二時を回っている。翼達は夜の学校に忍び込み二階の資料室にいた。辺り一面今は既に使われていない物が数多く並んでいた。その中でも月の光を浴びその鏡は不気味に光り輝いていた。その鏡には明と楓の姿は映っているものの翼の姿が映っては居なかった。

「どうなってんだよ、これ。」

明がその鏡を見ながら言った。ふふふと突然、不気味な笑い声を上げ翼は楓と明の方を振り向き言った。

「お二人様ご案内〜。」

眩しい程の光に包まれた。二人は何が起こったのか理解できなかったが、その光景自体には見覚えがあった。

「部室？」

其処は夜の学校、七不思議部の部室だった。しかし、楓は何処か違和感を感じその原因が理解できた。

「違う、この字全部逆さまになってる・・・。」

ガラガラガラっと部室のドアが開いた。二人はその場から後ろに二歩ほど下がったが、その中から出てきた人物を見て警戒を解いた。

「翼？」

「いや～参ったよ。この鏡の事調べてたら、閉じ込められちった。いや～全く不思議だ～。」

と笑い始めたが、明に殴られ翼は今の現状を二人に伝え始めた。

「いや、それでねこの二人を見つけたってわけよ。」

頬に鈍い感覚のある翼は居なくなっていた二人の女子生徒と一緒に居たのだ。

「で。ここは何もかも逆で、お前は本物ってわけだな。」

はいっと翼が静かに答える。

「大体、お前達だって俺の偽者に騙されたんだろ。」

うっと明が声を詰まらせた時、廊下に足音が響いた。二人は会話をすぐさま止め、震える女子生徒の口をふさいだ。その足跡は静かに部室の前を通り過ぎそのまま何処かに行ってしまった。

「誰なのかな？」

楓が問いかける。

「う～ん。僕が見たときは明だった。」

笑いながら翼が答えた。明は驚かなかった。

「へぇ～俺ね。で、強かった？」

明の言葉を無視して翼は話を続けた。

「多分、あの鏡からこっちに来れたんだから戻れるはず。」

「じゃあ何で翼はそれで戻らなかったの？」

「う～ん、昼間は駄目みたいなんだよね。だから夜になるまでここにみんなで隠れてたってわけ。」

「じゃあ早速行こうぜ。」

そう明が言ったとき、校内放送のスイッチが入った。

『君達は逃げられないよ。君達は僕を暗いあの部屋に閉じ込めたんだ、だから君達も同じ気持ちを味わうべきだ・・・。』

女子生徒の二人はその声を聞くなり震えていたが、明と楓は比較的大丈夫であった。この時の翼は面白いと言わんばかりに満面の笑みを浮かべていた。

第四話　映らない鏡　後編

第四話　映らない鏡　後編

大きなその鏡は毎日その前を通り過ぎる者を映し出していた。毎日毎日、彼は休まず映し続けた。

『楽しそうだな。今日はいい事あったのかな。あ、あの子制服のボタンが取れかかってる。』

たまに声を掛けてみるけど、その声は相手には伝わらない。それでも彼は訴えかけた。

『別に聞こえていなくてもいいんだ・・・・。』

「ねえ、私はどうしたらいいのかな・・・・。」

それは放課後だった。その子は彼の前に立ち映し出される自分に問い掛けていた。彼はそんな彼女を唯見つめるだけだった。

その次の日にも彼女はやって来た。鏡に映る自分に決して返って来る事の無い言葉を問いかけ続けた。

「私はどうしたらいいの？私は・・・・。」

彼女は病気。毎日来るうちに彼は彼女の悩みを知った。勿論どうしてあげる事も出来ない。でも彼は、彼女の姿を借りて彼女に言っ

た。

『毎日を楽しく考えればいいじゃないか。僕はここから動けないけど、ここを通る人たちの事を考える事しか出来ないけど、それでも毎日が楽しいよ。』

彼の声が始めて伝わった瞬間だった。彼女は始めは驚いていたが、それはすぐに無くなった。それ以来、彼女は何だか明るくなった気がした。彼も自分の声が伝わる彼女との会話が楽しかった。

『今日はあの子来ないな・・・。』

その次の日も、又その次の日も彼女は来なかった。彼はその訳を直に理解できた。それ以来彼は通り行く者達を映し出せなくなった。その為、学校はその鏡を取り外し暗闇の中へと閉じ込めた。

『さみしい。さみしい。暗い。寒い。会いたい。会いたい・・・。』

もう彼の声の届く相手は居なかった。

「おい。もういいんじゃないか？」

明が教室から顔を出し辺りを見渡していた。

「よし。じゃあ行くぞ。」

「ん？でも鏡の世界だから、反対だぞ。だから、こっちだな。」

明とは逆の方向を指差した。それでも、彼らの中にはこの鏡の感

情が絶えず流れていた。

「何事も無かったわね。ちょっと残念。」

「そんな事無いみたいだぜ。」

翼がみんなの足を止めた。暗闇から姿を現したのは明だった。

「こっちの俺はどうなんだろうな。」

翼を押しのけ、明が前に出てきた。

「おら～ぶっとばし！」

明の拳が鏡の明に当たった。ぐふっと声にならない声を出し、鏡の明が宙を舞った。

「あ～やっぱり。こっちのお前は激弱なんだな。」

翼と楓がくすくすと笑ったが、明はがっくり肩を落とした。

鏡の前に立ったがやはりその姿は映らなかった。又、あの校内放送が始った。

『無駄だよ。君達は出れないよ。ここで一生を過ごしてもらうよ。大丈夫、あっちの世界にはこっちの君達を送るから。』

そう言って彼は笑い始めた。

「もうやめて、もうやめてよ・・・。」

その声は草辺　実宮だった。

「君達のお友達ずいぶんとこの鏡と中良さそうだね。」

鏡に映った彼女を見ながら明が言った。女子生徒は不思議な顔をした。

「彼女のことは私達は知らないわ・・・。」

『君は死んだんじゃ・・・。』

「あの時のあなたは優しかった。でも、今のあなたは・・・。」

悲しそうな顔の彼女が鏡の中に映る。

『君は、僕の前でそんな顔をするのは始めてあった時以来だ。』

「でもあなたが変えてくれた。今だってそう。」

『僕は君の笑顔が見たかった。みんなの笑顔が好きだったから。でも今僕のしている事はみんなを悲しませてる・・・。みんなごめん・・・。』

気がつけばそこは元の世界なのだろうか、目の前には草辺　実宮が居た。

「ありがとう、ありがとう・・・。」

彼女は鏡と其処に居る全員にそう言って彼女は消えた。

『ごめんなさい・・・。』

そう鏡は言うとその不気味な光が消え、翼達の姿が其処にあった。

「ひゃはは。気にすんなよ。」

翼が笑いながら言った。

その鏡は昔の様に、いつもの場所いつもの様に其処を通る者を映していた。

「でも、もう一人の翼も見てみたかったな。」

「うん。一体どんなんだろうね？」

二人の話題はもう一人の翼に夢中だった。アニメは見ない。勉強大好き。数え切れないほどの可能性と考えられない彼を想像し彼らは笑った。くだらないっと翼が部室を出て向かったのは、あの鏡だった。

「俺は俺だしな。」

翼はそう言って鏡の前で笑った。

『確かに。』

っと鏡の中の翼も笑った。

第五話　白紙の本　前編

第五話　白紙の本　前編

図書室で面白い本はないかと今日も森正太郎（もり しょうたろう）は目を凝らしながらその膨大な数の本の中から自分にあった本を探していた。時おり彼の舌打ちが聞こえてくるのは、続いた本の一冊だけが見当たらない時であった。彼が無造作に入れられて入るその本棚を見ると無性に腹立たしく感じるからだ。だが、そんな感情を裏腹に彼はその本棚に入る本達を元に戻してやろうなんて気は全くと言っていいほど無かった。

「ん！？何だこりゃお勧め？」

お勧めと書かれた紙が一枚、彼の見つめる本棚のある一部に貼り付けてあった。彼は迷うこと無くその紙の裏に隠れたその本を手に取った。

「白紙の本ねぇ～」

表紙にそう書かれた本を手に正太郎はその本をめくった。

「ん？何でこれ何も書いて無いんだ。つまんね～な。」

ペラペラとページをめくるが、一文字も字が書いていなかった。正太郎はだから白紙の本かっと微笑してそれを元の本棚に返そうとした。

あっと正太郎が声を上げた時、その本は彼の手から落ちていった。ドンっと厚みのあるその本は勢いよく地面に当たった。

「あ～もう・・・。ん！？」

彼がその本を拾い上げるさい落ちた時に開いたその一ページが目に入った。

「さっきまで白紙だったのに何か書いてある・・・。」
本には今にも消えそうな薄い字でこう書かれていた。
『この本が白紙なのは知りたい事をあなた自身が決められるからです』

「こ・・これどうやって使うんだ。」
そう言いながら彼はページをめくった。
『使い方は、知りたい事を思いながらページをめくるだけ』
彼は恐怖もあったがそれ以上に優越感などの感情も数多くあった。目の前の本を持つ手がわずかに震えていた。

「君、それ借りるの？借りないなら、僕が借りたいんだけど。」
びっくりして後ろを振り返ると寝起きなのだろうか、髪はぼさぼさで頭にはアイマスクを付けている男が一人頭を掻きながら立っていた。正太郎はその本を後ろに隠し、言った。

「いや・・・これは俺が借りるから。」
そういうと正太郎は貸し出し受付の方へ走って行った。

「全く、誰だよあいつはこの本の事知ってんのかよ。」
そう言いながら正太郎はページをめくった。
『彼の名前は滝野翼（たきのつばさ）、彼は私を知っている』
びっくりして彼は又その本を落としてしまった。

「本は大切に扱ってください」
受付の人に起こられてしまった。
彼がこの本を落とした要因は二つあった。一つは正太郎自身が翼

を知っていたからだ、翼自身は変人として一部で有名であったためだ。その彼がこの本の事を知っている事はある程度理解できた。だが、もう一つの要因はこの本が自分自身の事を私と言った事だろう。正確には書いてあっただが、これは意識のあるものだと正太郎は理解した。

教室内の空気は張り詰めていた。今日は数学の小テスト。余裕のある者より、そのテストに向けての勉強をしている者のほうが多いのでる。正太郎も本来なら焦っている者の一人なのだが、彼は普段より明らかに落ち着いていた。

「今日あるテストの答えを教えてくれ。」

そう小声で言うとページを開く。勿論、今日あるテストの答えが書いてあった。正太郎はそれを、ばれないようカンニングするためあらゆる所に答えを仕込んだ。その時だ、健太に声を掛けられたのは。

「おい、正。お前ずいぶん余裕だな。」

高野健太（たかのけんた）である。彼とは同じテニス部でお互い小学生の時からの友達である。

「そんなんじゃないよ。俺もこれから勉強。」

「ふ～ん・・・ま、がんばれよ。」

そう言って健太は自分の席へと戻って行った。

「全く健太の奴、何考えてんだよ。今日テストだって言うのにあいつこそずいぶん余裕じゃんか。」

そう言って正太郎は目線を白紙の本へと戻した。

『いい点を取る正太郎はどんな勉強をしているのか？』

彼の心の答え・・・。正太郎はこの本で相手の考えが分かる事を知った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0860c/

七不思議部

2010年10月11日13時45分発行